

地域社会づくりにおける「つながり」概念の検討

鎗田進也*

1. はじめに

「地域におけるつながりの希薄化」という文脈は、社会福祉の文献や論文等で時折みられることであり、地域社会づくりにおける「つながり」の重要性を指摘する研究者は多い。しかしその際、疑問に思うのは、地域社会づくりにおける「つながり」とは何かということである。地域社会づくりにおける「つながり」という場合、少なくともその「つながり」とは何のつながりなのか、またどのような質のつながりなのかということを考える必要がある。「つながり」とは多義的な概念であり、その上、時代が変化する中で40、50年前に求められた「つながり」と現代において求められる「つながり」とは違うと思われる。またどのような「つながり」を構築するかによって、住民間の交流等の手段のあり方も異なることが推測されるからである。したがって、地域社会づくりにおける「つながり」とは何かを明らかにすることが重要なのである。しかし地域社会づくりにおける「つながり」を主張する研究の多くでは、「つながり」が自明の事として捉えられ、「つながり」を概念定義している研究者はほとんどいない。したがって本研究では、「つながり」概念に含まれる意味と「つながり」の質を明らかにし、その上で現代において求められる「つながり」の考察及び定義を行うことを目的とする。地域社会において家族構造や住民関係が変化する中で、高齢者の社会的孤立や子どもの体験不足等、各世代における課題が顕在化している。このような状況に対して地域社会でのつながりが上記の課題に効果的な影響を及ぼすことが考えられる。その意味で社会福祉からの研究が求められるのである。なお、筆者は上記の題目等において「地域社会づくり」という用語を繰り返し用いているが、この概念につい

て簡単に述べたい。筆者は別の研究で「地域社会づくり」に関連する用語である「まちづくり」、「地域づくり」、そして「コミュニティづくり」に関する概念の比較検討を実施した。そして結論として『小学校区』や『中学校区』を範疇として、その中で共通の目標に向かって住民と住民が相互に関わりあいながら、絆を持つてつながりや連帯を構築すること」と定義しているため、本研究においても上記の意味で「地域社会づくり」を用いることとする。

2. 「つながり」の意味の検討

2. 1 「つながり」をテーマとする論文及び資料にみられる「つながり」概念

社会福祉を専門としている林(2008)は長野県社会福祉協議会が進める「住民が主体となって進める小地域福祉活動」の取組みを紹介している。そしてその中で「住民が集まり、交流し、ふれあうこと。近隣の住民が集う。通りがかった大人が気軽に腰をかけて話す」ことが「つながり」であるとしている。また増山(2007)は、「介護の問題や子育ての課題を支えあい、励ましあう基本的な『つながり』が失われ」と記している。そして山下(2003)は、つながりを形成するには、関わりが重要であり、つながりをネットワークと表現している。

心理学を専門とする五十嵐(2009)は「私たちは友人・知人等との社会的なつながりの中で暮らしているが、このような人と人の社会的なつながりは、社会的ネットワークと呼ばれている。そして社会的ネットワークは、人間関係や対人関係と同じ意味で用いられ、とくに人と人のつながりの在り方に注目した概念である」と述べ、つながりに関連する概念として「社会的ネットワーク」をあげている。

* 立正大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程
キーワード：つながり、ムラ社会、家族

内発的発展としての地域づくりを主な研究テーマとしている淀野（2009）は、徳島県那賀町木頭（旧木頭村）のダム反対運動から起こった地域づくり実践の中から、「つながり」について「地域外の人々との交流」、「地域内外の人々との情報交換や学びあい」、「地域内・地域間の組織・個人のネットワーク化」、そして「情緒的な共感」が「つながり」を構成するものであると述べている。またNPO活動を実践しているアタナーズ・ペリファン（Perifan Atanase, 2008）は、社会的つながりを再構築するためには、4つの段階が必要であるとしている。「第1段階は、人と出会い、知り合い、親しくなること。第2段階は、近所同士でパンやバーターの貸し借り等小さなサービスを相互に行うこと。第3段階は、子どもの急な病気等に対する隣人の相互扶助や助け合いを形成することである。そして第4段階は、近所のホームレスや病人の面倒を複数でみる、あるいは高齢者の身近な世話を交代でやる等、より長期的な視野での助け合いである」と述べている。宮島・島蘭（2003）は、「つながり」に関わる従来の学術用語は様々であるとした上で、「つながり」を「個々人と他者や共同体の間のさまざまな絆や関係」を漠然と表わす語として用いている。そして『日本語新辞典』（2005）では、「つながる」を、「①切り離されていたもの同士が一続きになる。②離れたり切れたりしないで続く。③ある物事と深く関係する。連帯」としている。

上記のように、論文及び資料の中で「つながり」という用語を掲げている研究者や実践家の「つながり」に関する記述をみると、「つながり」には次の7つの要素があることがわかる。「連帯」、「交流」、「人々との情報交換や学びあい」、「情緒的な共感」、「ふれあうこと」、「社会的ネットワーク」、「相互扶助・支え合い」である。しかしこれらの要素はさらに絞り込むことができる。「つながり」を手段ではなく結果として捉えるならば、「連帯」、「情緒的な共感」そして「社会的ネットワーク」が「つながり」の要素として分類できるからである。そして「情緒的な共感」と「絆」は心理的な意味であるとして推測できる。しかし、「連帯」と「社会的ネットワーク」は多義的な概念であるため、さらに深める必要がある。そこで、この2つの概念と「つながり」と関連する用語としてしばしば用いられるソーシャル・キャピタル（以下、SCと略す）について検討していきたい。

2. 2 「つながり」と関連する「連帯」、「社会的ネットワーク」、そして「SC」概念の検討

2. 2. 1 「連帯」概念

まず『日本国語大辞典第三巻』（2006）では、「連帯」を「2つ以上のものを結びつらねること。互いに関係をもちあうこと。連係。②法律で2人以上の者が共同して行為またはその結果に対して責任をもつこと」と書いている。また「連帯感」に関しては、「意識の上で他とつながっているという感情。同じ仲間にいるという意識。仲間意識」とある。上記の定義の中で「連係」という用語があったので、「連係」について調べると、「互いにつながること。他と密接な関連をもつこと。つながり」とある。さらに『社会学事典』（1986）では、「連帯」について「デュルケーム（E. Durkheim）の鍵概念の一つ」と記し、「社会的連帯」については、「広義には、多少とも緊密な人々ないし集団相互の依存と連携の関係を指すが、狭くは、目的を共通にする人々や集団の精神的な共感による統合や相互維持をいう。デュルケームは、社会の進化を社会的連帯の型の交替として捉えたが、その用法はどちらかといえば広義のそれである」と述べている。そこで、デュルケームの『社会分業論』をみると、たしかに「連帯」という用語が数多く用いられている。しかし具体的に「連帯」とは何かについては記述されていない。そのため『社会分業論』という著書全体を踏まえ、デュルケームは「連帯」をどのように捉えているのかを把握することが必要になる。以下、この作業を研究した鈴木（1989）の記述とデュルケームの『社会分業論』を翻訳した井伊（1989）の記述を参考にしながら検討する。

まずデュルケームは、「かつての共同体内部は、閉鎖的であるものの、共有地を全住民の共有地として保存していた。そして内部には相互扶助があり、平和だった。戦争や革命が起こるのは分業が発達して諸個人が個人的・利己的になり、社会的連帯や結束を共通意識のもとから減退させるからだ」と述べ「社会的連帯」を「分業」と対立させ、「分業」が発達することによって、「社会的連帯」が低下すると述べている（しかし後の記述では、「分業」と「社会的連帯」が統合すると述べている）。

またデュルケームは「社会的連帯が強い場合には、それは人々を互いに強く引き合わせ、頻繁に接触させ、互いに関係しあうべき機会を多くつくりだす」とも述べている。つまり、個々人が持続的に、そして強く関

わるような集合体では、連帯が強くなると述べているのである。では、「互いに関係しあうべき」とは具体的にどのようなことか。鈴木はこの点に関して、「頻繁な接触とそこから生まれる緊密なコミュニケーション、これが規範的秩序の生成における前提条件であり、連帯の第1の位相である。集団内の分化が推し進められ、同時に、個別化する主体内の関係に秩序が与えられていくためには、まずその個々の主体が互いにふれあい、知らせあわなければならないとし、連帯はそこから生まれるのである」とまとめている。

さらにデュルケームは「社会的連帯」を「有機的連帯」と「機能的連帯」の2つに分けて捉えている。田原(1971)によれば、『有機的連帯』とは、個性的な異質の諸個人が特定の関係で結ばれる社会結合である。そして、分業に基づく異質な諸個人の機能的差異が織りなす連帯から成り立つもので集合意識が弱体化し、個人意識が優越する近代社会がモデルである。『機能的連帯』とは、諸個人が相互に類似している程度に応じて結合の強さが決定されるような社会である」と言う。つまり、「機能的連帯」が、自分とは異なる他者に依存することによって間接的に社会と結びついている状態であるかつてのムラ共同体的な連帯であるのに対して、「有機的連帯」とは、個人と社会が直接結びついた連帯、つまり組織型社会としての関心や職業ごとに集められた連帯であると言える。

その他の研究者による「連帯」概念を見ると、社会福祉の研究者である岡本(1997)は、「連帯」に関して直接定義はしていないものの、多くの市民が福祉の受給者であり、そのための費用を市民全体で負担するという意味で社会的連帯を捉えている。

ここまでの連帯概念をまとめると、「社会的連帯」と「分業」は対立概念であり、「分業」が発達することで、「社会的連帯」は低下する。しかし人々が頻繁に接触し、互いに緊密なコミュニケーションをとれる機会を多くつくすることで社会的連帯は強くなる。そして連帯には「有機的連帯」と「機能的連帯」がある。また連帯という概念は、社会保障分野における義務と責任という観点においても用いられるということになる。

2. 2. 2 「社会的ネットワーク」概念及び「SC」概念

菊池(2002)は、一般的に社会的ネットワークにおける「ネットワーク」を、複数の点をいくつかの線で

結んだパターンとし、「点」にあたるのは行為者・組織・機関(制度)であり、「線」にあたるのは行為者間の社会関係であると述べている。つまり、社会的ネットワークとは複数の行為者である「点」が結ばれた社会関係ということになる。社会的ネットワーク分析は、こうした行為者間の関係パターンを分析すると言うのである。

社会学者である森岡(2004)は、以下の3点を社会的ネットワークの特徴としてあげている。第1は、一定の形態と人々の特定の意識や行動を関連させて捉えるという点である。第2は、個人と直接接触のある友人だけでなく、この友人の友人とのネットワークも視野に入れる等、まさしくネットワークとして横に広がる紐帯の連鎖を取り扱うようになった点である。そして第3の特徴は、他者との対面的接触ないし人と人との紐帯だけでなく、個人と施設や機関とのつながり、また施設間、機関間のつながりを社会的ネットワークとして捉えた点にある。

そして森岡が述べる「紐帯」という点に関してグラノヴェッター(Granovetter, 1973)は、「弱い紐帯の理論(Theory of weak ties)」を主張している。グラノヴェッターによれば、人と人との関係は紐帯の強さという概念で表わされる。強い紐帯とは、2者間において、一般に接触頻度が高く、接触頻度も長く、強い相互関係にある、いわゆる親しい人、身近な人と言われる人同士の関係と呼ぶ。逆にあまり親しくない人、あまり接触のない人と人との関係は弱い紐帯で結ばれていると言う。そして、構成員同士が強い紐帯で結ばれている場合、凝集性が高く、閉鎖的になりやすい。それに対して弱い紐帯では、構成員同士がそれほど親しくないもので、凝集性は低いだが、各構成員を通じて他の個人とつながることができる可能性がある」と述べている。

このように、「社会的ネットワーク」には、第1に、菊池と森岡が述べているように、個人間だけのネットワークではなく、個人と組織、組織と機関というように複数の対象によるつながりがある。そして第2に、そのつながりにはグラノヴェッターが述べるように、紐帯の強度により違いがあるということになる。

次にSCについてであるが、SCとは、ロバート・パットナム(Robert D. Putnam, 1993)がMaking Democracy Workにおいて発言した言葉で、「人々の協働行動を促進することによって社会の効率を向上させることのできる『信頼(trust)』、『規範(norms)』、

『ネットワーク (networks)』といった社会組織の特徴を表すものである。そして「信頼」, 「規範」, そして「ネットワーク」について補足すると, 「信頼」についてパットナムは, 「知っている人に対する厚い信頼 (親密な社会的ネットワークの資産)」と, 「知らない人に対する薄い信頼 (地域における他のメンバーに対する一般的な信頼)」に区別している。そして, 信頼の測定については, 「一般的に人は信頼できるか, それともできるだけ用心するに越したことはないか」という問いが一般的であると述べている。

次に「規範」であるが, パットナムは様々な規範の中でも, 相互性の規範を特に重視している。そして一般化された相互性の規範は非常に良い結果をもたらすSCの要素であるとされる。相互性のシステムの中で行動する個人は, 短期的な利他主義と長期的な利己主義によって特徴付けられる。たとえば, 私はあなたが将来私のことを助けてくれるだろうという期待をもってあなたを助けるという例をあげている。そしてこの相互性の規範は利己心と連帯の調和に役立つとされている。

最後に「ネットワーク」をパットナムは, 職場内の上司と部下の関係のように垂直的なネットワークと, 合唱部や協同組合などの水平的ネットワークに分類している。そして垂直的なネットワークは, 社会的信頼や協力を維持することはできないものの, 水平的なネットワークは密になるほど市民は総利益に向けて幅広く協力すると考えた。さらに家族や親族を超えた幅広い「弱い連帯」を重視し, その中でも特に, 「直接顔を合わせるネットワーク」が核であるとしている。このようにSCの概念を踏まえると, 複数の個人間, 複数の個人と組織間との紐帯を測る指標としては, 先にあげた接触頻度や親しさだけでなく, 相手に対する信頼や愛他的な相互性があるということになる。ここまで, 「つながり」に関連する用語から「つながり」の意味について検討してきたが, 次は, 「つながり」の質について検討する。

3. 「つながり」の質に関する検討

3. 1 ムラ社会における「つながり」

ムラ社会には4つの特質がある。第1は, 長谷川(1987)が「ムラは, かなりの封鎖性を持ち, 内部の団結と相互扶助による相互関係に基づいていた」と述べるように, ムラ内部では強固な団結と相互扶助が成り

立っていたという点である。そしてその背景について中佐古・吉田(1989)は『ムラ』は最初は自然発生的に生まれた集落であった。この集落では主として稲作農業が行われる関係で種々の共同作業が多く, また水利施設等は共同で管理されてきた。そのためこの集落で生活することは, 共同体の一員となることでもあり, 共同作業に参加することでもあった」と述べている。玉城(1978)も「このような共同体では, 農民それぞれが非自立的・非完結的な性格を持っていた。したがって, 水田農作における用水は個々の農民の私的な資産材として分割することはできず, 水は部落による用水管理を媒介にしてのみ, 個々の農民経営は用水を獲得し稲作生産を行うことができたのである。このほか『ゆい』と呼ばれる農繁期の労働交換方式は, 農民経営が労働組織の面でも, 必ずしも完結的とはいえなかったため, 農民相互が補完することによって, 個々の農業経営の自立性が確保されてきたといってもよい」と述べている。つまり, ムラ社会内の個々の住民は自立しておらず, 自分以外の住民の助けがなければ自立して生活を維持することができなかった。そのため, 自分以外の住民を助けることが結果的に自分の生活を維持することにつながるという状態であったということになる。戦前のムラ社会では, 大部分の人が家の職業を継ぎ, 家業を受け継いだ跡取りが親を扶養するという形態をとっていた。そのため, 中佐古・吉田(1996)が「ムラの隣人関係は永続的である。代替りはあっても隣人関係は変わらないのである。したがってムラの人間関係においては, 永続性ということを考えたつきあい方をしなければならないのである」と述べるように, 相互支援を成立させないということは, その後支援を受けることができなくなる可能性が高く, 自分の生活を維持することができなくなることを意味していた。

第2の特徴は, ムラ社会内では, 同質性・同調性が求められたということにある。この点に関して中佐古・吉田(1996)は次のように述べている。「ムラの内部においては, ムラの平穏な発展のために, 『同調性』が強く要求される。同調性とは, ムラのしきたりを遵守することであり, みんなと同じ言動をすることである。ムラとしての意思決定などに際しては, 全員一致がタテマエであり, 人と変わったことをすることは許されない。『出る杭は打たれる』のであり, 極端な場合は『村八分』にされる。『村八分』とは, ムラのしきたり

や掟を破った者が出た場合、そういう者を出した『イエ』に対する制裁である。イエが複数集まって形成されるものが『ムラ』である。したがって、ムラ社会においては個人とか個性とかよりもイエが優先し、イエよりはムラという集団の論理が優先するものである。すなわち、ムラ社会が安穏な状態にあるのは、個々の住民の生活が一定の状態にあるということである。そして仮に住民の1人がムラの水を他の住民より多く得ると、一定の水を得られない住民がいることを意味する。したがって、ムラ社会内に格差を生まず、ムラ社会の平穏な状態を維持するためには、誰もが同じ行動をすることが求められたのである。

第3の特徴として、中佐古・吉田(1996)が「ムラの外部の者に対しては、極端に閉鎖的であり、ムラの内部にあたってはむしろお互いに開放的である。ムラという集団を守り維持していくためには、集団の秩序を乱す恐れのある者に対して閉鎖的にやるのは当然である。またムラは運命共同体であるから、内部の人間関係は平等であり、自分の問題は隣人の問題であるとされる」と述べているように、ムラ社会外は内と比べ閉鎖的であったという点がある。

第4の特徴として、個人に対する拘束的行為や自立が許されない反面、一定の平等が保たれていたという点がある。この点について島田(1988)は「昔の村落共同体は隣保組織がよくできていて、生活の相互扶助が徹底していたが、その代わり、村での拘束的行為が多く、個人の行動の自由は少なかった」と述べている。また福武(1986)も「日本の村や町は決して民主的ではなかった。しかし食っていけないような人たちを抱え込んで支えるような構造があった」と述べている。

3. 2 高度経済成長期以降の地域社会におけるつながり

次に、地域社会構造が大きく変化してきた高度経済成長期以降のつながりの特質について述べていきたい。高度経済成長期以降から現在までの地域社会のつながりの特質として、中佐古・吉田(1996)は「都市の成立そのものが人為的であるという性質を持っている関係上、都市の人間関係の特質も、端的に言うならば人工的、合理的であるということができよう。農村の場合のように、共同的という要素は無く、隣人関係も何代も変わらないということはないから、都市における人と人との付き合いは、一時的であり表面的である。

また、農村の場合と比べて個人の個性は比較的自由であるという長所もある。しかし通勤圏の拡大により職と住が分離され、住宅は単なるネグラとなる傾向が進み、相互不干渉が進むと、人間はまわりにあふれているが、お互いが無関心であり、お互いが孤立しているという非人格の人間関係とも言えるような状態になっている」と指摘している。また島田も「わが国でも近代化が進みにつれて、都市では、隣近所の付き合いは、摩擦を起こさせないために深入りせずに、お互いの拘束を少なくするような習慣ができていった」と述べている。つまり、第1の特質は、地域社会の住民相互の関わりは、一時的で、表面的だということである。第2の特質は、まわりに人はいるが互いに無関心であり、互いが孤立している。つまり地域社会の住民をそれぞれ1つの点とすれば、点と点がつながっておらず、個々に独立した状態で存在しているということである。第3の特質は、「個人の個性が比較的自由」であるということである。そして第4の特質は、互いに拘束し合わない関係が地域社会の中で築かれているということである。

上記の点は、ムラ社会の特質から逃れたい、あるいはムラ社会への反発心ということも影響しているだろう。しかし広井(2009)は「我が国は集団内部では、過剰なほど周りに気を配ったり同調的な行動が求められる一方で、集団を離れると、誰も助けてくれる人がいないといった『ウチとソト』の差が激しい社会となっており、それが生きづらさなどにつながっているともいえる」と述べるように、ムラ社会の特質がまだ残っているという複雑な日本人の特質を指摘している。ではどのような点においてムラ社会の特質が残されていると考えるべきだろうか。

ムラ社会では、「同調性」と「閉鎖性」が特質の要素としてあったが、広井が「我が国は集団内部では、過剰なほど周りに気を配ったり同調的な行動が求められる」と述べるように、「同調性」は現代のつながりの特質であると言える。また「閉鎖性」について、広井は、「高度経済成長期以降の我が国は、会社や家族等の閉鎖的な集団の中で生活を送ってきたが、閉鎖的なコミュニティはかえって個人の孤立を招き、『生きにくい』社会になっている」と指摘している。さらにグラノヴェッターも、「構成員同士が強い紐帯で結ばれている場合、凝集性が高く、閉鎖的になりやすい。それに対して弱い紐帯では、構成員同士がそれほど親しいわけではな

いので、凝集性は低い、各構成員を通じて他の個人をつなぐことができる」と指摘している。つまり閉鎖的ではなく、開放的であることが望ましいということになる。

「強固な団結」、「自由に対する個人の束縛」、そして「出る杭は打たれる」は、それぞれ「一時的・表面的」、「お互いに拘束しない」、そして「個人の個性は自由」という特質へ変化している。つまり、この3つの特質は、現代において求められるつながりのあり方として考えることができる。最後のムラ社会の特質として「助け合い・相互扶助」があったが、つながりを形成するためにはコミュニケーションや互いに関わることが前提となる。したがって、「助け合い・相互扶助」は潜在的にも現在において求められると考えられる。

4. 現代において求められるつながり

ここまで、「つながり」の意味と質についてそれぞれ検討してきたが、それらを踏まえ「つながり」の概念定義をすると、以下ようになる。

「連帯」には、「2つ以上のものがつらなること、同じ仲間であるという認識」、「緊密な人々ないし集団相互の依存、精神的な共感による統合」、「間接的な助け合い」、「人々を互いに強く引き合わせ、頻繁に接触させ、緊密なコミュニケーションを通して互いに関係する中で生まれる形」という要素があった。次に、「社会的ネットワーク」には、「個人間だけでなく、組織間、個人と組織間における関係」、「強い紐帯と弱い紐帯があり、前者は凝集性が強く閉鎖的になりやすいが、後者は構成員同士がそれほど親しいわけではないので、凝集性は低い。そして後者がつながりを形成する上で必要」という要素があった。そしてSCでは、「接触頻度や親しさだけでなく、相手に対する信頼や愛他的な相互性がある」、「直接顔を合わすネットワークが核」という要素があった。

つながりの質ということに関しては、「一時的・表面的」、「お互いに拘束しない」、そして「個人の個性は自由」、「同調的」、そして「開放的」等の側面があった。そしてこれらを統合すると、「つながり」とは、「①2つ以上のものが交流することで結びついている状態。②つながりの状態にあるものはそれほど親しくはなく、一時的・表面的な関係性を築いている。また拘束されず自由で開放的である。しかし構成員相互は同調的であることを潜在的に意識し、一定の緊密な情緒的な共

感状態にあることを望んでいる。③つながり状態にある者は、直接顔を合わす互酬的な相互による支え合いの中にいる」状態とまとめることができる。

しかしながら、これだけでは十分であるとは言えない。とくに①と②に関しては補足する必要があると筆者は考える。まず①の「2つ以上のものが交流することで結びついている状態」だが、「交流」の程度を明らかにすることが必要である。なぜならば、「交流する」という用語は多義的であり、たとえば挨拶も交流のひとつに含まれる等、程度の幅も大きいからである。もちろん挨拶を軽視しているわけではない。挨拶は地域社会におけるつながりを形成する前段階として重要な手段である。人と人がつながるためには、相手を知るための挨拶が必要だからである。しかし挨拶だけではつながりを形成するのに十分ではない。つながりを構築するためには、単に、地域社会において自分の存在を他の人に知らせるだけではなく、自分が困っているときに助け合える関係づくりまで発展させることが重要である。したがって挨拶等の簡単な関わりだけではなく、相互支援できるような関係を構築できるような交流が必要なのである。そしてこのことは②の「つながりの状態にある構成員同士はそれほど親しくはなく、また拘束はされないものの、構成員相互は一定の緊密な共感状態にある」と関連している。つまり、お互いに助け合えるような関係を築くためには、ある程度の親しさ及び信頼関係が求められるのではないかと考える。たとえば、挨拶をよく交わす人でも他人の家の敷居をまたぐことは乏しい。そこに一定の信頼関係があるからこそ、安心感等を抱け、他人の家をまたぎ、そこから多様な助け合いが可能になるのではないだろうか。

では、安心感や信頼感を抱き、尚且つある程度の親しさがあるような関係の形として何があるのか。筆者は家族のような関係があると考え、岩上（2004）は、家族について次のように述べている。「家族といえ、子どもたちにとっては、『血縁でつながった両親』が、また大人の男女にとっては、妻または夫およびその配偶者との子どもが一緒に生活していることであろう。しかしこの考え方は、1970年代の終わり頃から変化している。結婚によらない出産も増える中で、1人親家族、子連れ再婚のステップファミリー、結婚しない同棲カップル、同性同士の結婚など、様々な『家族』がライフスタイルとして容認されるようになってきてい

る。今日では、人々は家族にカタチよりも『心地よさ』を求めているようである。本当の家族とは、愛情や深い信頼で結ばれているものだと多くの人が考えるようになった。今日では血のつながり自体よりも、愛情や信頼といった関係性の中身の方が重視され、それに対応して、家族もまた『こうあるべき』というカタチにこだわらなくなった」と述べている。つまり、何をもち「家族」とみなすかは、個々人の家族観によるところが大きい。それよりむしろ、家族と思われるカタチの中に、愛情や信頼感などが存在することの方が重要であると述べているのである。そして筆者も地域社会づくりにおける住民のつながりの中身というのは、愛情や信頼感等の心地よさを感じるカタチであるべきだと考える。しかしその中身は、かつての家族の中に見られた相互依存や強固な団結といった関係性ではなく、自立した個人間での相互支援に基づくことが重要である。閉鎖的であることは現代において望ましくないからである。

以上、地域社会づくりにおけるつながり概念に関して検討してきたが、上記の検討を踏まえ、地域社会づくりにおける「つながり」に関して定義したい。地域社会づくりにおける「つながり」とは、『小学校区』や『中学校区』を範囲として、その中で共通の目標に向かって住民と住民が相互に関わりあいながら、2人以上の自立した個人である住民が直接顔と顔を面して互いに関心を持ち、ギブ・アンド・テイク (Give and Take) の相互支援を行うことで、安心感や孤独・孤立感を解消できるような家族的な機能を地域社会の中で実現し、強固に拘束された状態ではなく、比較的自由な状態ではあるが、その中の一員であるという感覚を得られる心地よい状態」と定義する。

5. おわりに

本研究では、地域社会づくりにおけるつながり概念を文献研究を通して明らかにしてきた。しかし冒頭で述べたように、「つながり」とは多義的な概念である。そのため、多様な角度からこの概念については捉える必要がある。とくに、地域社会づくりにおいて「つながり」を感じるのは住民であるため、今後は、実践の中から住民が「つながり」をどのように感じているのかという点を踏まえ検討を重ねていきたい。

引用文献

- E. Durkheim *De la division du travail social - Etude sur l'organisation des societes superieures, Ire., 1893; 7e ed., 1960*, Paris, P.U.F./井伊玄太郎訳 (1989)『社会分業論上・下』講談社
- E. Durkheim *De la division du travail social - Etude sur l'organisation des societes superieures, Ire., 1893; 7e ed., 1960*, Paris, P.U.F./田原音和訳 (1971)『社会分業論』青木書店, p.451~452
- Granovetter, Mark S. (1973) "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology* vol.78, no.6, pp.1360~1380
- 長谷川昭彦 (1987)『地域の社会学: むらの再編と振興』日本経済評論社, p.77~82
- 林恭裕 (2008)「クローズアップ・社協活動 日常的なつながりを求めて—長野県/長野市社会福祉協議会」『月刊福祉91(5)』, pp.94~99
- 広井良典 (2009)『コミュニティを問いなおす: つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房, p.15~18
- 福武直 (1986)『福祉社会への道: 協同と連帯を求めて』全国大学生生活協同組合連合会, p.5~6
- 五十嵐裕 (2009)「くらしと社会的つながり」金政祐司&大竹恵子編『健康とくらしに役立つ心理学』北樹出版, p.137~146
- 岩上真珠・清水浩昭・森謙二・山田昌弘編 (2004)『家族革命』弘文堂, p.7
- 菊池美代志・江上渉編 (2002)『21世紀の都市社会学』学文社, p.47~48
- 増山均 (2007)「子どもと公民館—「つながり・やくわり」創造の拠点に(特集 公民館が支援! 地域の子育て)—」『月刊公民館(602)』, pp.16~19
- 松井栄一編 (2005)『日本語新辞典』小学館, p.1127
- 見田宗介・栗原彬・田中義久編 (1986)『社会学事典』弘文堂, p.932, p.421
- 宮島喬・島蘭進編 (2003)『現代日本人の生のゆくえ: つながりと自律』藤原書店, p.56
- 森岡清志 (2004)『都市社会の人間関係』放送大学教育振興会, p.29~31, p.102~103
- 中佐古勇・吉田寛治 (1989)『現代の人間関係』紀伊国屋書店, p.84~87
- 中佐古勇・吉田寛治 (1996)「日本人社会の人間関係」『現代社会の人間関係』嵯峨野書院, p.71~87
- 岡本祐三 (1997)『自立と連帯の高齢社会: あたらしい介護システムの創造』解放出版社, p.57~76
- Perifan Atanase・南谷桂子 (2008)『隣人祭り: 「つながり」を取り戻す大切な一歩』木楽舎, p.108~109
- Robert D. Putnam with Robert Leonardi and Raffaella Y. Nanetti (1993) *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy* Princeton University Press. Princeton, New Jersey. p.167~176
- 島田一男 (1988)「コミュニティの心理学」島田一男監修『近隣社会の人間関係』ブレーン社, p.5~6
- 小学館国語辞典編集部 (2006)『日本国語大辞典 第三巻』小学館, p.1333, p.1329
- 鈴木智之 (1989)「連帯概念と連帯的社会像—E. デュルケーム『社会分業論』の主題と論理構成をめぐって—」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要(30)』, pp.63~71
- 玉城哲 (1978)『むら社会と現代』毎日新聞社, p.41~61
- 山下敏夫 (2003)「まちづくりは人とのつながりづくりから(福

地域社会づくりにおける「つながり」概念の検討（鎗田）

社サービストレンド 福祉教育とまちづくり—福祉教育推進の
課題を考える)『月刊福祉86(7)』, pp.59~61 (3), (641)』, pp.64~69
淀野順子 (2009) 『『戦い』と『つながり』』『月刊社会教育 53

(2011年1月31日受理)